

[原著論文]

看護学生のEQ (Emotional Quotient) 情動指数の学年間比較と関連要因

梨本光枝<sup>1)</sup>、中村圭子<sup>2)</sup>、五十嵐浩<sup>3)</sup>、田辺要補<sup>4)</sup>、斉藤まさ子<sup>2)</sup>、  
丸山敬子<sup>1)</sup>、新谷恵子<sup>1)</sup>、親松善靖<sup>5)</sup>、三浦洋子<sup>3)</sup>

キーワード：EQ、看護学生、学年間比較

A comparison of advancement on emotional quotient of nursing students  
as they move up their school years and their related factors

Mitsue Nashimoto PhD,RN,Keiko Nakamura,RN, Hiroshi Igarashi,RN,  
Masako Saitou,MS,RN,Yosuke Tanabe,RN,Keiko Maruyama,MS,PHN,  
Keiko Shintani ,PhD,RN,Yoshiyasu Oyamatsu,RN, Youko Miura,RN

Abstract

This study aimed to examine the state of emotional quotient (EQ) of nursing vocational school students and their differences among school years, and to define the potential factors related such differences. The study sample included 385 students from the nursing vocational school, with 199 participants in their first-year and 186 participants in their third-year. To measure the state of EQ, this study used questionnaire surveys based on EQ instrument developed by Omura and another based on an instrument related to EQ (8 items including demographic characteristics, career motivations, and human interaction). To measure differences in EQ among school years, a t-test, and multiple regression analysis was used to measure for EQ-related factors. Results for school-year EQ score ( $\pm$  SD) showed that persistence, sympathy and self-awareness were significantly higher in first-year students than in third-year students. For factors related to each dimension of EQ, the four dimensions of sympathy, self-management, flexibility, and optimism were related to respondents' abilities to enjoy interpersonal interaction. This study also hypothesized that on-site practicum training within nursing education provides the opportunity for students to effectively learn the emotional aspects of the nursing profession. Though it was predicted that third-year students who completed the training would have a higher EQ score, the results of this observational study showed higher EQ scores in first-year students. Because this study was an initial cross-sectional study, further research is needed using a longitudinal design to determine differences in EQ based school year.

Keyword : EQ, nursing student, move up their school years

- 
- 1) 新潟医療福祉大学医療技術学部看護学科
  - 2) 青陵大学福祉心理学部看護学科
  - 3) 新潟県立新発田病院附属看護専門学校
  - 4) 北里大学保健衛生専門学院
  - 5) 厚生連佐渡看護専門学校

梨本光枝 新潟医療福祉大学 医療技術学部 看護学科

[連絡先] 〒 950-3198 新潟市島見町 1398 番地  
TEL/FAX : 025-257-4583  
E-mail: nasimoto@nuhw.ac.jp

## 要旨

この研究は看護専門学校生の情動指数 (EQ) の実態、学年間の差異を明らかにすることと、EQ の領域と、関連する要因を明らかにすることを目的とした。対象は看護専門学校1年生199名、3年生186名の合計385名 (男子学生41名・女子学生344名) であった。方法はEQの実態にはEQ調査票 (大村政男) による質問紙調査と、EQに関連する調査票 [人口学的特性、看護師になろうとした理由、人と接するのが好きか否か等の8項目] による質問紙調査を実施。統計解析は、EQの学年間比較にはt検定を行い、EQの関連要因については重回帰分析を行った。

結果、学年別EQ得点 (平均±SD) においては、共感性と自己認知力、粘り強さは1年生の方が3年生よりも有意に得点が高かった。EQの各領域と関連する要因では、共感性、自己統制力、柔軟性、楽観性の4領域が、人と接するのが好きであることと関連を示した。私たちは看護学教育においては、臨地実習が情動学習の効果的な学習の機会であると考え、臨地実習がすべて終了した時期の3年生のEQ得点は1年生よりも高くなると予測した。しかし、横断研究ではあるが、結果は1年生のほうが高い得点であった。今後は縦断的研究で学年による差異を明らかにすることが課題である。

## I はじめに

看護は人との関わりを基に展開されることから、看護は対人サービスであり、感情が労働の大きな要素になっていることから感情労働といわれている。<sup>1)</sup> 人間関係を基盤とする看護実践においては対象の理解がまず重要である。

そのため、看護師は知的能力が高ければ良い看護ができるわけではない。看護能力を構成する要因は問題解決能力だけでなくEQも関与していると考えられる。しかし、その実態は明らかにされていない。3年課程の看護専門学校では1-2年生は講義と演習、3年生は臨地実習中心のカリキュラムである。情動学習の効果的な機会となるのは、様々な人間とかかわりを持つ臨地実習でないかと考える。しかし、看護専門学校生の情動指数 (以下EQとする) の実態や学年による差異は明らかにされていない。そこで我々は、臨地実習体験のない1年生とすべての臨地実習を終了した3年生を対象にEQを測定し、比較検討したので報告する。

## II 研究目的

看護専門学校生のEQを1年生と3年生で比較検討する。

看護専門学校生のEQに関連する要因を明らかにする。

## III 研究方法

### 1・対象者

N県内の看護専門学校 (3年課程) 5施設 (1学年40名定員3校・50名定員1校・80名定員1校) に在籍中の1年生199名と3年生186名 (男女比は男子学生41名・女子学生344名) の合計385名に調査票を配布した。年齢は202歳±2433。調査票の回答を提出したものは調査に同意したのものとして、また提出しなかった者は調査に同意しなかったものとした。

### 2・調査時期

1年生は2002年4-5月 (入学時) に実施し、3年生は2002年3月 (看護師国家試験終了後) に実施した。

### 3・方法

EQ調査票とEQに関連する調査票は無記名記述式の質問紙調査を調査者が研究対象学生に説明し実施した。

(EQテストの評価方法)

・EQ調査票【EQの6領域についての定義は1) 共感性については、その人と全く同じに感じたり、その人の気持ちを察することができる。2) 自己認知力については、自分の本当の気持ちを自覚する。自己の心的状態である。3) 自己統制力については、自分の欲求や衝動をコントロールしていくこと。4) 粘り強さについては、欲求不満に対する耐性の強さをいう。5) 柔軟性については、創造的で柔軟なものの見方。6) 楽観性については、後退や挫折があっても最後はうまくゆくだろうという強い期待を維持できる能力とした。】<sup>2)</sup> 大村政男のEQ調査票の6領域の各項目は12項目、合計72項目の質問である。回答は各領域とも12項目のうち10項目はイエス、ノー、どちらも決められないときを?の選択とし、2項目についてはAかBかの選択とした。得点はイエスは2点、ノーは0点、?は1点とし、A・Bの項目はAは1点、Bは2点とした。各領域の最高得点は24点である。12点を標準中間点とし、20点以上はその領域の高得点を示し、10点以下はその領域の低得点を示している。

(EQに関連する調査票の構成)

・EQに関連する調査票 [人口学的特性 (性別・年齢・学年・兄弟姉妹数・何番目)、祖父母との同居経験 (同居時期・同居の合計年数) 看護師になろうとした理由 (身内の病気や死を経験して・看護師の働く姿を見て・人の役に立つから・自分を磨くことができるから・高収入が期待できるから・資格が得られるから)、友人数、友人に対する満足度 (とても楽しい・楽しい・あまり楽しくない・楽しくない)、人と接するのが好きか否かの8項目] による質問紙調査。

## 4・統計的解析方法

EQの学年間比較にはt検定を行い、危険率は5%以下とした。

EQの関連要因については学年・兄弟姉妹・祖父母との同居の経験の有無・看護師になろうと思った理由(身内の死を経験して、看護師の働く姿を見て、人の役に立つから、自分を磨くことができるから、高収入が期待できるから、資格が得られるから)、友人数・人と接するのは好きか否かを予測変数として、EQの6領域を結果変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。危険率は5%以下とした。統計ソフトはSASを使用した。

## 5・倫理的配慮

調査対象者には書面で調査研究について十分な周知をほかり、全員より書面にてインフォームドコンセントを得た。説明内容は研究の目的、研究方法、個人情報保護、調査で得られた情報は研究以外には使用しないこと、研究協力の任意性と撤回の自由についてである。研究によって得られた情報は研究終了後に破棄することとした。

## IV 結果

- 1・調査票の回収率は95.8%で369名であった。有効回収率は99.5%で1年生が193名、3年生が174名で

(男子学生38名・女子学生32名)合計367名であった。

- 2・EQ調査票の各領域の平均得点が20点以上、10点以下のものは1年生、3年生ともなかった。年齢・性別による差はなかった。
- 3・学年別EQ得点(平均±SD)においては、共感性は1年生が16.1±2.7点で3年生が15.0±2.9点であった。自己認知力は1年生が13.8±2.8点で3年生が12.2±2.7点であった。粘り強さは1年生が13.1±3.7点で3年生が11.2±3.7点であった。共感性と自己認知力、粘り強さは1年生の方が3年生よりも有意に得点が高かった。自己統制力と柔軟性、楽観性については学年による有意差はなかった。(表1)
- 4・EQに関連する調査票では性別、年齢、兄弟姉妹数、祖父母との同居経験はEQのどの領域とも有意差は認められなかった。
- 5・重回帰分析による分析結果では、共感性は、学年、人と接するのが好きという項目と、看護師になろうと思った理由のうち、自分を磨くことができるという項目と関連を示した。自己認知力は、学年と関連を示した。自己統制力・柔軟性・楽観性の3領域は人と接するのが好きという項目と関連を示した。粘

表1 学年別EQ得点

	1年生 (n = 193)	3年生 (n = 174)	p 値
	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	
共感性	16.1 ± 2.7	15.0 ± 2.9	*
自己認知力	13.8 ± 2.8	12.2 ± 2.7	*
自己統制力	14.8 ± 3.0	14.5 ± 3.2	ns
粘り強さ	13.1 ± 3.7	11.2 ± 3.7	*
柔軟性	11.2 ± 3.7	11.3 ± 3.4	ns
楽観性	15.5 ± 3.5	15.5 ± 3.4	ns

\* p < 0.001 ns : not significant

表2 EQと関連する要因

結果変数	予測変数	決定係数 R <sup>2</sup>	p 値
共感性	学年		0.001
	人と接する	0.0736	0.0085
	自分を磨く		0.0232
自己認知力	学年	0.053	<0.0001
自己統制力	人と接する	0.0149	0.0218
粘り強さ	学年		<0.0001
	身内の死を経験	0.0687	0.0228
柔軟性	人と接する	0.0264	0.0022
楽観性	人と接する	0.0572	<0.0001

り強さは、学年、看護師になろうと思った理由のうち、身内の死を経験することの項目と関連を示した。EQの各領域はその他の要因との関連性は認められなかった。(表2)

## V 考察

### EQ 得点の学年間比較

EQの各領域の平均得点は高得点を示す領域も低得点を示す領域もなかったことについて、看護活動は、人間活動を基盤とした人への援助活動であることから看護学生の情動指数を示すものとして意味のあること考える。1年生と3年生のEQ得点を比較した結果は、共感性、自己認知力、粘り強さの3領域が3年生の方が明らかに低かった。なかでも共感性の得点に影響した事柄については臨地実習との関連で3点が考えられる。第1点に、看護学生の臨地実習では、看護過程の展開がひとつの目標であり、患者の感情に反応しつつ看護の視点から客観的に検討し即座に対応することが求められる。そのため学生は、目の前の課題を達成しなければという意識が先行してしまうと考える。第2点に、看護学生は目の前の対象者を理解しようとする願望は強くても、対象者との年齢や健康レベルの違いから学生は類似体験が乏しいことが考えられる。第3点に学生は臨地実習の繰り返しにより観察力、判断力、実践力が養われる一方でなれが生じると考えられことである。私たちは看護学教育においては、臨地実習が情動学習の効果的な学習の機会であると考え、臨地実習がすべて終了した時期の3年生のEQ得点は1年生よりも高くなると予測した。しかし、横断研究ではあるが、結果は1年生のほうが高い得点であった。今回EQにおける共感性には明らかに学年差が見られた。しかし、小松らの共感経験尺度を用いた研究では共感性に学年差はなかった<sup>3)</sup>とある。また、自己認知力の得点が1年生より3年生で低かったことについては、青年期は複数自己や偽りの自己に対する混乱や葛藤を経て自己を統合していく時期である。<sup>4)</sup>学生は臨地実習では、臨地実習指導者やスタッフなどの他者評価を受け、また自身も自己評価を行うことで一層自己概念が揺さぶられるためではないかと考える。粘り強さの得点でも1年生より3年生の得点が低いことについては、3年生は臨地実習が長期間にわたり、かつ学習課題は広範囲にわたっており常に全力を出し切るには無理があるのではないかと考える。加えて臨地実習期間中は、感情規則に則り様々な人と対応することが求められる。感情管理はエネルギーを消耗するものである。そのため、自己の到達可能な目標を設定し、それに見合った力加減で対処するようになるのではないかと考える。今回はEQの6領域の得点を1年生と3年生で比較検討した。結果については母集団が異なることによる学年の特性としてとらえるか。データ収集の時期によるものか。つまり1年生は入学時であり、3年生はすべての実習が終

了し、国家試験後であったことにより、調査時期が関係していることについては明確ではない。今後は縦断的研究で学年による差異を明らかにすることが課題であると考ええる。

### EQ と関連する要因

EQの各領域と関連する要因では、共感性、自己統制力、柔軟性、楽観性の4領域が、人と接するのが好きであることと関連を示した。人と接することが好きであることは、他者に関心を持つことができ、自分も他者も独自性のある人間として尊重し、自他の成長・変化の可能性も見出すことができると考える。人と接することなくして看護実践は成立しないことであり、対象である人の健康回復に関わることで、人への関心が高まり相手の気持ちを大切に信頼関係を築く行動につながるのではないかと考える。このことで人間関係を育てていく力、人と接近するスキルが培われてくると考える。また、粘り強さの領域については身内の死を経験することと関連を示した。このことは死という辛い体験を越えることで耐性の強さが培われたものと考えられる。臨床現場では医療事故が後を絶たず、ますます看護職に求められる期待が高くなってきている。さらに、臨床現場では卒業後においては即戦力を求めている。しかし、看護学基礎教育の持続性と各人の発達段階にふさわしい臨床現場での配慮も今後必要になってくると考える。今回EQテストとEQに関連する要因を調査した。看護学基礎教育における臨地実習では情動学習が効果的な機会であると考えた。しかし1年生より3年生のほうが得点が低いという結果から単に数値の低さととられるのではなく、少なくとも臨地実習を継続することで質的な変化というものがあるのではと考える。

## VI 結論

- 1・1年生と3年生のEQ得点を比較した結果、共感性、自己認知力、粘り強さの3領域が3年生のほうが低かった。
- 2・EQの各領域と関連する要因では、共感性、自己統制力、柔軟性、楽観性が人と接するのが好きという項目と関連を示した。
- 3・臨地実習は情動学習の効果的な機会であるが、繰り返しの実習では慣れという現象も生じ、プラスの面ばかりでなくマイナスの面もある。

### 引用文献

- 1) 武井麻子：感情と看護 人とのかかわりを職業とすることの意味、医学書院 40-41,2001.
- 2) 大村政男：EQテスト p.21～p.27.現代書林, 1997.
- 3) 内田伸子：発達心理学, 放送大学教育振興会, 251, 2002.
- 4) 小松万喜子：看護大学生の共感性と対人関係尺度に関

する学年比較, 第 33 回に本看護学会論文集 看護教育 2002, 135-137.

#### 参考文献

- 1) ダニエル・ゴールマン, 土屋京子訳, :こころの知能指数, 講談社, 1995.
- 2) 大村政男:EQ テスト, 現代書林, 1997.
- 3) 内山喜久雄:EQ その潜在能力の伸ばし方, 講談社, 1997.
- 4) 今田寛:学習の心理学, 放送大学教育振興会, 2000.
- 5) 大橋英寿:社会心理学特論, 放送大学教育振興会, 2002.
- 6) 梨本光枝ほか:看護学生の EQ からみた傾向について, 長岡看護福祉専門学校紀要第 2 号, 2004.
- 7) 中淑子ほか:看護学生の EQ 因子の研究 (1), 県立長崎シーボルト大学健康栄養学部紀要第 2 巻, 2001.